باد از تهران

～　テヘランからの風　～　　第１５号　１月１０日配信

伊里中学校の皆さん，新年明けましておめでとうございます。昨年はテヘランからの風を読んでいただき、ありがとうございました。今年も、イランの「いま」が分かる内容、イランの「本当の姿」が少しでも伝わるよう、定期的に通信をお届けできればと思っています。

2012年が始まって、はや10日経ちましたが、改めてふり返ってみると、2011年は、本当にいろんなことがあった1年間でした。私は、3か月間しか日本にいませんでしたが、その間に、東日本大震災が発生し、その後も多くの悲しい事件・事故、衝撃的なニュースがここイランにも伝わってきました。しかし、一方で明るい話題もたくさん伝わってきました。2012年が、伊里中学校と先生方・生徒のみなさんにとって、すばらしい1年になりますことを、遠くイランより祈っています。　　3年生のみなさんは、いよいよ入試の月を迎えましたね。冬休みは充実していましたか？あと約3週間後には、私立の入試が控えていることと思いますが、いままで取り組んできたことを信じ、また、担任の先生をはじめ、応援してくださる全ての先生を信じ、自分の夢に向かってラストスパートをしてください。また、1・2年生のみなさん、1年後、2年後はあっという間にやってきます。今から備えをしておけば、ずいぶん楽な1年、2年後を迎えられることでしょう。　　さて、2012年、最初の通信のテーマは、「イランの冬」についてです。今までの通信を読んでくださった方はお分かりのように、イランはとても大きな国（日本のおよそ4．5倍）で、気候もさまざまです。しかし、日本と同じ北半球に属しているので、日本と同じように11月頃から2月頃にかけて「冬」がやって来ます。しかし、私にとってイランで初めて経験する「冬」は、日本の「冬」と似ているようで、ちょっと違うところもあります。今回は、そんなお話・・・。

◇日本ではかぼちゃを食べるけど・・・。

1年間で太陽の出ている時間が最も短い日を何というか、知っていますか？答えは、冬至（とうじ）です。去年は、12月21日（水）でした。日本では、古来より冬至にはかぼちゃを食べ、ゆず風呂に入る習慣がありました。これは、調べると、「古来より人々は冬という季節に生活の不安を感じており、無病息災を祈るために、野菜の少ない季節に栄養を補給するためのかぼちゃを食べたり、その香りに邪を祓う霊力があると信じられているゆずのお風呂に入るなどして夜をこしていた」ようです（『日本文化いろは事典』参照）。ここイランでは、というと・・・。ありました。同じく冬至の日、一年で最も夜が長い日を特別な日とする習慣がイランにもあったのです。イランでは、冬至のことをシャッベ・ヤールダ（shabbe YALDA）といいます。シャッベとは「夜」、ヤールダは「誕生」を意味します。あとで出てきますが、クリスマスとも関わりがあるようです。

シャッベ・ヤールダの夜、イランでは、3つのものを食べます。1つめはザクロ（写真右下）、2つめはスイカ、そして3つめはナッツです。この組み合わせは詳しくは知りませんが、日本と同じく健康を祈るための食物だそうです。12月になると、店頭にスイカがお目見えします（写真左下）。真冬にスイカ？と思うかも知れませんが、そこは国土の広いイランのこと。この時期でもスイカが採れる地域があるのでしょう。日本ではまず冬に食べることのできないスイカが売られていて、おや？？と思っていたところ、お店の人に「シャッベ・ヤールダの夜にスイカを食べると、健康になるぞ。」と言われ、買ってみました。さすがに、真夏のスイカに比べると甘みが満足のいくものではありませんが、寒い冬に食べるスイカの味が、何か特別に感じられました。

また、シャッベ・ヤールダの日には、おじいちゃん、おばあちゃんの家に集まる習慣があるそうです。そして、イランを代表する詩人・ハーフェズの詩を詠んだり、親戚で集まって話に花を咲かせたりして、夜を過ごすのです。ですから、この日はいつになく交通量が多く、また、夜になってケーキやお菓子の箱を持って歩く人の姿が、あちこちで見られました。おそらく、多くのテヘラン市民が、おじいちゃん・おばあちゃんの家に集まって、夜遅くまでホームパーティを楽しんだことでしょう。

◇日本ではクリスマスツリーやサンタクロースが飾られているけど・・・。

日本では毎年、11月半ばを過ぎると、街中のデパートやケーキ屋さんなど、いたる所にクリスマスの飾りつけが見られ始めます。そして、12月に入ると、クリスマスのイルミネーションが点灯し、街は一気にクリスマスムード一色になります。日本ではごく当たり前になっているクリスマスですが、これはもともとキリスト教のお祭りでした。日本は、アメリカやヨーロッパの文化や風習を積極的に取り入れる傾向が強かったため、すごく定着して、毎年の冬の風物詩となっています。

では、ここイスラム教の国、イランではどうでしょうか・・・？イランはイスラム教の国であるため、クリスマスという文化はありません。従って、街中にクリスマスツリーやサンタクロースの飾りつけは見られません。また、クリスマスのイルミネーションもありません。「なぁ～んだ。今年は、サンタクロースは来ないのか？」とうちの子どもも残念がっていましたが、いくつかのお店をよく見渡すと・・・。ありました。ここイスラム教の国にも、クリスマスの習慣はあったのです。

その習慣をもたらしたのは、イランのお隣の国・アルメニア。といっても、どこか全く分からないと思いますので、ちょっと紹介。地図帳を開き、カスピ海という世界最大の湖を見つけてください。そのカスピ海の西に、小さな国があります。ここがアルメニアです。実は、イランとアルメニアは歴史的に古いつながりがあり、今でもイランにはアルメニア人が多く住み、彼らのためのアルメニア教会やアルメニアンスポーツコンプレックス（スポーツ施設）などがテヘランにもあります。イランは、イスラム教以外の宗教にも寛容な国で、市内にはイスラム教のモスク以外に、キリスト教の教会や、ユダヤ教のシナゴーグ（礼拝堂）などもあります。キリスト教の教会がある辺りでは、クリスマス関連グッズを販売していますし、アルメニアンスポーツコンプレックスでは、年に一度、クリスマスバザールが盛大に開催されます。家から歩いて行ける距離だったので、先日行ってみた所、会場いっぱいに所狭しと並べられたクリスマスグッズに、ここがイランであることをしばし忘れてしまいました。また、私たちのような外国人がよく利用するデパート（写真右）やケーキ屋さんには、日本と同じようにクリスマスの飾りつけがされていました。店に入るとクリスマスツリーがあり、サンタクロースの置物やぬいぐるみがありました。聞く所によると、2年前はクリスマスなど、西洋の文化に対してとても規制が厳しかったそうで、街中でクリスマスの飾りつけをしているのは見られなかったそうです。しかし、現在では、そのような規制もないようで、わりと自由な雰囲気になってきているようです。

◇日本では大晦日・お正月で慌ただしいけど・・・。

今年の紅白歌合戦は、久しぶりに紅組が優勝したそうですね。我が家には日本のテレビを見るチューナーがないので、日本のテレビ番組を見ることは出来ませんが、風のうわさに聞きました。日本では、新しい年を迎えるにあたり、いろいろな準備をします。家の玄関にはわらで編んでだいだい（みかんのようなもの）をつけたお飾りをつけたり、丸く整えた鏡もちを床の間に飾ったり、家の門に門松をたてたり・・・。これらはいずれも、新しい年を迎えるために古来より日本人が毎年行ってきた習慣です。では、イランでは・・・？全くありませんでした。というのも、以前、ペルセポリスの紹介をした号で少し触れましたが、イランの人々にとっての新年は、まだ先なのです。この説明は、暦のお話をしないといけないので少々ややこしくなります。

イランでは、「イラン暦（ペルシア暦）」という、イラン独自の暦を採用しています。1年は365日です。また、イスラム教の国なので、「イスラム暦（ヒジュラ暦）」もあります。イスラム暦では、1年は355日です。また、世界の流れで、「西暦」も使用しています。このように1つの国の中に3つの暦が存在する、不思議な国がイランです。しかし、イラン人にとって、一番なじみが深く、生活の中でも広く使われているのはイラン暦です。イラン暦の新年の幕開けすなわち正月、つまり1月1日は、日本などの使う西暦でいうと、3月21日に当たります。何で？これは、先ほど述べた太陽の動きと深い関係があります。しかし、これ以上暦の話を続けると、本題から離れてしまうので、これ以上ふれません。

とにかく、世界の多くの国でカウントダウンが行われ、新年を祝う花火が打ち上げられたり、「あけおめ」メールが飛び交っていた瞬間、イランでは全く通常どおりの1日が過ぎていきました。イラン人に聞いても、「おまえの国（日本）で新しい年が来るのはいつか？」と逆に聞き返される始末で、西暦に対する意識はとても低いと思います。　　では、イランの人々にとっての新年とは、どんなものでしょうか？どんな準備があるのでしょうか？これは、まだ経験していないので聞いた話ですが、7つのSで始まるものを家に集め、飾りつけを行うそうです。7つのSとは、全てペルシア語でserke（酢）、sib（リンゴ）、sir（ニンニク）、sekke（貨幣）、somagh（ソマーグ：赤いスパイス）、sabze（草）、senjed（ホソバグミ：茶色のドングリのような実、食べられるらしい）のことです。これらはともに縁起がよいとされていて、それらを食卓に飾り、新年を祝うのです。

暦が違えば、節目となる日も違ってくるのですね。そういえば、中国も日本から遅れることおよそ3週間後に中国の正月（旧正月）を迎えます。日本のメディアを通じて、世界から送られてくる情報を見ていると、毎年、世界の至る所での新年の瞬間が報道されてきましたが、普段と変わらない1日を過ごしている人々も意外と多いのかも知れませんね。

◇雪のよく降る街・テヘラン・・・。

もうすでに何度もお伝えしましたが、イランはさまざまな気候をもつ国。イランでも北部に位置するテヘランの街は、標高1500～1700mくらい（鳥取県の大山の山頂付近）です。従って、冬の寒さは、岡山県と同じかそれ以上です。また、今年は例年になく雪が多く、すでに家の近くで4回ほど積雪を経験しました。テヘランに降る雪は、日本の雪と少し違います。それは、サラサラの雪。日本はどちらかというと大きく、重たい雪が降ります。この違いは、湿度の違いによるものです。テヘランは、とても空気が乾燥していて（湿度10％台）、雪に含まれる水分が少ないので、サラサラの雪となります。

乾燥といえば、冬の日の朝。日本だと、窓は結露して水滴がびっしりとついているのではないでしょうか？しかし、ここテヘランでは、冬の日の朝も、窓に水滴がつくことはありません。空気が乾燥し、空気中の水分がとても少ないため、結露することもないのです。窓に息を吹きかけてもくもることはほとんどなく、また、学校の教室の窓がくもって、そこに落書きができるということもないのです。

雪についての話題をもう一つ。テヘランから北に車で1時間ほど走った所に、ダルバンドサルという街があり、そこにはスキー場があります。ここは、毎年、テヘラン日本人学校の子どもたちがスキー実習に訪れる場所です。冬休みのある日、今年のスキー実習の下見を兼ねて、学校の先生たちと一緒にスキーに行きました。日本を発つ前から、「イランにはスキー場があるから、スキー板を持ってくるように。」と言われていて、自分の板を用意してきました。久しぶりに滑ってみましたが、前に書いたように、サラサラの雪のため、シュプールを描くと粉雪が舞い、それが太陽の光に照らされてとても眩しく、また美しく感じられました。遠くにも雪を抱いた山々が連なり、一見すると、ヨーロッパのスキーリゾートではないかと思うような光景が広がっていました。　　スキー場の様子は日本とほとんど同じです。リフトもありますし、休憩のできるレストランもあります。教えてくれる人（インストラクター）もいます。しかし、日本のスキー場のように人が多くありません。休日でなかったせいもありますが、とてもすいていました。まだまだイランでは、スキーやスノーボードは一部のお金持ちの人のスポーツのようです（リフト券代が一日当たり30万リアル＝日本円で2000円程度）。

◇イランの冬の味覚・・・

日本の冬の味覚と言えば何を連想しますか？岡山だったら、日生のカキですよね。他にも、日本海などで採れるカニ、おいしいミカンやリンゴなども冬の代表的な食物です。イランのスーパーマーケットや市場を春から夏、秋と見てきましたが、冬になって、それまでの季節に見られないものがいくらかあることに気がつきました。

まずは、多くの魚です。テヘランの魚屋さんには、大小さまざまの魚が並んでいます。大きなものでは、長さが1m近くあるものもあり、氷の上に、きれいに並べられています。基本的には白身魚で、中には、鯛に似た魚も並んでいました。イランを代表する魚は、カスピ海で捕れるチョウザメ。乱獲によって個体数が減っていますが、最高級のキャビアが採れることで有名です。魚屋の主人と話をしていると、「いいものがあるんだ！店の奥に来い。ただし、写真はダメだぞ！」と店の奥に案内され、見せてくれたのは黒いダイヤ、とも言われるイラン産の最高級キャビア。日本で買うと、100gがウン万円もする超高級品だそうです。さすがに写真禁止だけあって、味見をさせてはくれませんでしたが、丸いケースにびっしりとすきまなく詰まっているキャビアを見て、その美しさに圧倒されました。魚以外にも、冬ならではのものがあります。野菜ではカブやダイコン、ハクサイなど。日本でも冬の鍋物に重宝しますが、イランでもこれらの野菜が冬になると出回ります（残念ながら夏には買うことはできないようです）。加工品では、ビート（てんさい＝さとうだいこん）を煮込んだもの。紅色のたれの中に、これまた紅色のビートが置かれ、湯気を上げています（写真右）。さとうだいこんというだけあって、味は甘いです。商店街の軒先にはこれらを売るコーナーができ、寒い日に暖かな湯気を上げて、道行く買い物客の目をくぎづけにしています。果物ではみかん。これは、日本でよく出回っているみかんと外見は全く同じです。味は、少し酸っぱいかな？でも、日本っぽさを味わうことができ、我が家では常に食卓をいろどっています。また、前に書いたザクロや、茶色の毛におおわれた椰子（やし）の実なども果物屋さんの店頭に並べられています。バナナやリンゴなど、四季を通じて店頭に並ぶ果物もありますが、季節によって見られたり見られなくなったりする果物に旬のありがたさを感じずにはいられません。

باد از تهران

～　テヘランからの風　～　　第16号　2月3日配信

伊里中学校の皆さん，こんにちは。1月も気がつけば過ぎ去り、一昨日から2月です。時が経つのは本当に早いもので、平成23年度も残すところ、あと2か月弱となりました。岡山県の私立入試も、終わりましたね。3年生のみなさん、私立入試お疲れさまでした。自分の力を十分に発揮することができましたか？

そういえば、先日、インターネットからうれしいニュースが届きました。備前市出身の重友梨佐選手が大阪国際女子マラソンでみごと優勝。今年夏に行われるロンドンオリンピックの最有力候補になったそうですね。みなさんと同じ備前市から、世界で活躍するアスリートが生まれるかもしれませんね。

時を同じくして、先日、テヘラン日本人学校の同僚の先生も、イランの隣の国であるアラブ首長国連邦のドバイであったマラソンに出場し、みごと42．195kmを完走したそうです。伊里駅伝も先日行われたことでしょう。つらく、きびしいマラソン・駅伝ですが、必ずゴールがやってきます。勉強も、学校生活も、部活動も・・・。苦しいことを乗り越えた先には、必ず、明るい未来が待っています。私たちのテヘラン日本人学校も、イランという日本と比べると決して恵まれた環境ではない中で、そこに暮らす子どもたちのために日々力を合わせて頑張っています。今回は私の勤務するテヘラン日本人学校での1年間をふり返ってみたいと思います。

◇イランの良いところを見つけよう

「日本は世界でも指折りの工業国で、しかも勤勉で誠実。だから、日本は私が尊敬する国だ。」イラン人に日本のことを聞くと、10人中10人から、同じような答えが返ってきます。「おまえは何人だ？」と聞かれ、「ジャポニー（日本人だ。）」と答えると、決まって、「OK」と言います。何がOKなのか分からないのですが、とにかく、イラン人にとって、日本は「OK」な国、つまり、好きな国なのでしょう。日本人として悪い気はしないのですが、私はいつもこう付け加えます。「イラン　ハム　ヘイリー　フーベー（イランもとってもいい国だよ。）」と。私たち、海外の日本人学校で働く教師にとって、そこで学習する子どもたちにその国のことについて教え、また、それによってその国を好きになってもらうことはとても大切なことです。こういった教育を難しい言葉で「現地理解教育」といいます。

今年度、社会の授業や総合的な学習の時間で、何度も校外に出て、いろいろな施設を見学したり、話を聞いたりしました。活動のキーワードは、「イランって、すごいんだよ。」。その中で、私が関わった活動をいくつか紹介します。実際に見学したり、話を聞いたりすることはできませんが、みなさんも、これを読むと、ちょっと物知りになるかもしれませんよ。

イランの街には、たくさんの自動車が走っています。高速道路網も整備され、しかも、料金はただ。日本のようにちょっと走っただけで数百円もとられることなんてありません。逆に鉄道は日本の方が縦横に通っていて、イランは車社会だな、と思わされます。では、そのような車社会の国・イランの自動車はどうなっているのでしょう？イランは、世界で13番目の自動車生産国（約160万台）だそうです。ちなみに1位は、中国（約1800万台）。2位は、日本（約960万台）。3位はアメリカ合衆国（約770万台）です。そのような自動車生産がさかんな国・イランの自動車工場を小学3年生～6年生までで見学しました。場所は学校から西へ車で約30分の工場地帯。まわりには、大きな工場がたくさん並んでいます。そこの一角に、フランスの自動車メーカー「ルノー」や、イランの自動車メーカー「サイパ」を生産している「パルス・ホドロ（パルス＝ペルシアの、ホドロ＝工場）」はありました。中にはいると、オートメーション化された機械が数多く並び、広い工場内にもかかわらず、作業員はまばらです。多くの機械が動き、順番に溶接や内装部品の取り付け、ドアやタイヤの取り付け、キズの有無のチェックなどの工程を見学することができました。（写真左）岡山県には、水島コンビナートに三菱自動車の工場がありますが、みなさんが小学5年生の社会科の授業で学習した、日本の自動車工場と変わらない光景が広がっていました。しかも、日本と違って作業をしているすぐそばまで行って見学をすることができます。休憩している作業員とおしゃべりをすることもできます。日本よりもおおらかな応対にびっくりしながらも、なかなか見ることができない自動車生産の現場を見ることができました。ここでできた自動車は、テヘラン市内はもとより、イラン全土にキャリアカーで運ばれていきます。イラン国内で生産された自動車は、ヨーロッパ車や日本車、韓国車などの輸入自動車よりも安く、イラン人にとってお手頃価格のようです。（ちなみに、この工場では少数ではありますが、日産自動車も生産しています。部品のうちのいくつかは日本から船や飛行機で運ばれ、ここで組み立てられるそうです。）

次に、イランにある古代遺跡からの出土品などを一堂に集めた「イラン考古学博物館」に、全校児童生徒で行きました。ここは、テヘラン市内の中心エマーム・ホメイニ通りにあり、近くには中央官庁やかつての王様の宮殿、また商業の中心バーザールなどもある、テヘランの心臓部です。堂々とした風格の入口（写真左上）から中にはいると、まず、左側に古代バビロニア王国のハンムラビ王が定めたという、「ハンムラビ法典」（写真左）があります。それを見ながら順路に従って歩いていくと、年代順につぼや祭りに使ったと思われる水差し、動物の置物などが並んでいます。驚くべきはそのつくられた年数。一番古いものでB．C．6000年、つまり今から8000年前の出土品が多数あるということです。8000年前と言えば、日本では、縄文時代。その頃に、すでに高度な文明をもち、支配者がいたということを物語っています。そして、この博物館のハイライトは、ペルセポリスから出土した宝物の数々。先の通信（11号）でもお知らせしましたが、ペルシア帝国の王・ダレイオスⅠ世は、イラン南部の地に広大な都を建設し、西はギリシア・北アフリカから東はインドまでを支配する大帝国を築き上げました。毎年新年のお祭りの時には、使者が全国からみつぎものを持って都にやってきました。これら今から2500年ほど前に、使者たちが持ち寄った宝物の数々が展示されています。また、ペルセポリスの石段や破壊をまぬがれた石像なども展示されており、テヘランにいながらにして、イラン全土から集められた超一流の美術品・発掘品にふれることができる施設となっています。

もう一つは、イランの首都・テヘランにある高いタワーです。名前を「ミラッド・タワー」と言います。高さは435m（世界第7位）。建設中の東京スカイツリー（634m）には及びませんが、イランでは最も高い建造物です。完成は今から4年前ですが、外国人向けの公開は去年の春になって始まったばかりでした。付近は、テヘラン国際貿易コンベンションセンターとして整備されています。タワー上部の展望台からは、700万人以上がくらすイランの首都・テヘランの街をぐるり360度見渡すことができます。ここからは、テヘランが山のある北部からなだらかに下っている様子や、北にそびえるアルボルズ山脈のふもとまで、住宅地が迫っている様子、先に書いた縦横に走る高速道路などを手に取るように見ることができます。ところどころ、緑色に見えるのは大きな公園や道路沿いの緑地。あとは一面、白っぽい、あるいは茶色い壁の建物や高層ビルばかり。どこの国でも、首都への人口の集中は同じ光景のようです。

◇日本人としてのほこりをもとう

イランで生活をしていると、とかく日本のことを忘れがちですが、日本にいるときと同じように、日本の伝統的な習慣や文化に親しむこと、日本の良さに気がつくことはとても大切なことです。テヘラン日本人学校には、季節ごとに日本的な行事があります。先日行われたのは、もちつき大会。何と、ここイランの日本人学校には手作りの臼（うす）と杵（きね）があるのです。3年生のみなさんは、1年生の時に、ふれあい学級の方と一緒にもちつき大会をしたのを覚えているでしょうか。あのように、もちつき大会をしました。日本人学校の先生だけでは人手が足りないので、ほとんどの保護者の方の協力を得て、もちつき、雑煮作り、きなこもちづくりをしました。当日は、とても寒い日だったのですが、学校の校庭は寒さを吹き飛ばす熱気でした。また、これからのシーズンは、日本人学校のロビーには、お雛さまが並びます。これは、在イラン日本大使館の所有するお雛さまを借り、3月3日の桃の節句を祝うもので、ロビーがとても華やかになるそうです。行事ではありませんが、私が取り組んだ「日本的なもの」として、7月の七夕飾りや、中学生の保健体育の武道があります。中でも、武道では、去年伊里中学校で取り組んだ柔道に加え、相撲もしました（なぜか、土俵マットと体育用まわしがあったのです…）。初めての試みでしたが、中学部の生徒たち（男子2人、女子3人の計5人）はとても楽しく授業に取り組んでくれました。

（写真左より　みんなでペッタン、ペッタン／PTA会長と日本人会からの助っ人／講堂で柔道の授業）

さて、去年3月11日、未曾有の大津波が東日本各地を襲いました。イラン人から何度となく言われた「ソナミ」という言葉（イランの公用語であるペルシア語では、津波をこう発音するのです）。日本人学校でも、地震で被災された方に一刻も早く立ち直ってほしい、元気を出してほしいという思いから、秋の学芸発表会（文化祭のようなもの）で東北地方の民謡を合唱・合奏したり、「ふるさと」をテーマに学年ごとに発表したりしました。私の受け持つ小学校5・6年生は、学年発表で小泉八雲の『怪談～KWAIDAN～』の劇をしました。明治時代に日本にやってきた西洋人、その名はラフカディオ・ハーン。日本の各地を取材する中で、日本の古き佳き習慣や伝統、風俗などに心打たれ、やがて日本を第二のふるさととして選び、日本人になる決意を固めます。そして、民話や伝承をモチーフにした、独自の世界を作り上げます。それが「怪談」なのです。5・6年生7人が力を合わせ、キャストから照明、音響、舞台までを分担して行いました。「自分たちの力でできることをやろう！」そして、「観るものに感動を与えよう！」をテーマに、何度も何度も練習を重ね、本番では多くの保護者、日本人会の方にお褒めの言葉をいただきました。日本から遠く離れた地・イランに住んでいる子どもたちですが、日本人としてのハートを決して忘れることなく、日本のもっている良さを再認識してもらえればと思い、日々学校で子どもたちと接しています。

◇イランと日本との架け橋に…

イランの素晴らしさを知り、また、日本の良さを再認識した子どもたち。私たちが次に取り組んだのは、同世代の日本人・イラン人の交流でした。長年、テヘラン日本人学校はテヘランにあるブリティッシュスクール（イギリス人学校）と交流してきた歴史があります。今年度も、交流の予定でしたが、先のイギリス大使館襲撃事件で両国関係が悪化し、同校が閉鎖されたため交流ができなくなってしまいました。そこに、日本大使館より「イランで日本文化週間を開催する」との連絡が入り、日本人学校とイラン人学校との交流会計画が持ち上がったのです。

私は、かねてからイランの教育事情やどのような学習をしているのかに興味があったので、この取り組みをとても楽しみにしていました。計画にたずさわることはできませんでしたが、当日、子どもたちとともに交流会に参加し、とても貴重な体験をすることができました。

ここでイランの教育事情について少しふれます。イランの学校は毎年、9月21日（西暦）からスタートします。これは、前号で書きましたが、イラン暦の新年が3月21日（西暦）にスタートするのと関係が深いです。暦は3月21日スタートですが、学校などはそれから半年後の9月21日（西暦）スタート、つまり、秋の始まりとともに1年間のカリキュラムがスタートします。小学校は5年間、中学校は3年間。その後は高等教育を受けたり、働いたり。ちなみに、小学校の前にプレスクールという日本でいうところの幼稚園があります。小学校から完全に男女別習となり、男子校・女子校と分かれています。これは、イスラムの教えによるためで、男女がともに机を並べて勉強するのはイランの学校ではありません（日本人学校は例外的に男女共習が認められています）。授業は朝から昼までで、小学校の子どもたちは午後1時半くらいには帰宅することが多いです。その後、習い事に行く人、スポーツクラブに行く人などはそこに行きます。学校の授業内容は日本とほとんど同じですが、日本人学校の近隣の学校の場合、校庭がせまいため、体育はあまり活発でないようです（スポーツをしたい人は、クラブに通います）。公立と私立によってカリキュラムには差があり、私立は少人数のため、音楽や芸術、ダンスなどの表現活動が盛んだそうです。また、イランでは女性は人前で歌を歌ってはならないという習慣があるため、公立学校では音楽の授業はないです。しかし、私立学校では逆に、積極的に音楽指導をしているそうです。

このように、日本と大きく違う教育環境、教育システムをもつイランの学校。しかし、そこに通っているのは、目をキラキラ輝かせた子どもたちです。今回の交流では、日本の伝統的な遊びである、けん玉と折り紙を披露し、ともに練習したりつくったりしました。その後、1つのテーマに基づいてそれぞれが絵を描いて作品として仕上げたり、パッチワークのように布きれを使って相手の子の顔を布に描いたり…。芸術センスの豊かなイランの子どもたちはスラスラと題材に関係ある絵を描き始めます。日本人学校の子どもたちは、はじめ緊張していましたが、そこは同年代の子どもたち。すぐにうち解けて、ペルシア語や英語、はたまたボディランゲージなどをフルに活用し、楽しく作品をつくっている姿が印象的でした。幼いうちに外国人とともに何か活動したり、友達になったりすることは日本にいたらあまり経験する機会はないでしょう。しかし、ここテヘランでは、周りを見渡せば、外国人ばかりです。そういった環境で学校生活を送り、双方の国の文化や、人のもつ温かさなどを実感することは、将来にわたっての財産となることでしょう。次号は2月後半の予定（イランの砂漠都市・ヤズドについて）

（写真左より布で作ったパッチワーク作品／女子校の皆さんと／男子校の皆さんと）

باد از تهران

～　テヘランからの風　～　　第17号　2月20日配信

伊里中学校の皆さん，こんにちは。先週土曜日の夜に，「備前平野に春を呼ぶ」といわれる西大寺会陽（はだかまつり）が行われたそうですね。私も，日本にいるときには毎年参加していました。このイベントが終わると岡山県南部の寒さも少し和らぎ，だんだんと日が長くなるにつれ，「春が近づいているなぁ」と感じたものです。3年生の皆さん，県立自己推薦入試，お疲れさまでした。先日，内定通知の発表があったことだと思います。合格した皆さん，おめでとう！また，残念な結果だった人も，次の入試で合格すればいいんです。気持ちを引き締め，一般入試に挑戦してください。全員が希望する路（みち）に進めることを祈っています。

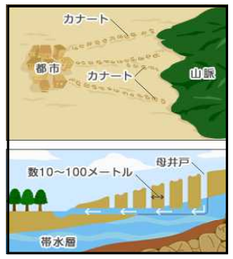
さて，ここテヘランを取り巻く国際情勢は緊迫していますが，私たちテヘラン日本人学校では，子どもたち，職員ともに「笑顔」と「元気」をモットーに，日々楽しく過ごしています。あと1か月で小学6年生，中学3年生は卒業です。残り1か月の毎日を大切に過ごしています。伊里中学校3年生の皆さんも，通い慣れた伊里中での生活もあとちょうど1か月となりましたね。毎日を大切に，たくさんの思い出をつくってもらいたいです。

今号は，先月半ばに訪れた，イラン中部の街・ヤズド（YAZD）についてです。これまでイランのいくつかの都市を紹介してきましたが，今回お伝えするヤズドの街は，イラン＝砂漠というイメージにぴったりの街。そして，古くからの町並みが残る，とても素敵な街でした・・・。

◇夏は40度以上，冬は氷点下，年間降水量50㎜以下の過酷な気候

砂漠の気候は極端です。年間を通して快適な季節というものはほとんどなく，初夏から初秋にかけては最高気温が40度を超える灼熱の大地に，また，冬は寒風ふきすさぶ底冷えのする大地となります。実は，イランの国土の大部分はこのような気候の砂漠がしめていて，農業や経済活動はおろか，人が住むことさえもままなりません。しかし，古来より，イラン人はそのような，言うなれば「不毛の大地」を利用する知恵を身につけてきました。ここヤズドをはじめ，砂漠の中には大小さまざまな都市が点在しています。そして，周りには緑の畑や数多くの樹木があります。年間降水量50㎜にも満たない場所で，人々はどうして生活をして，命をつないできたのでしょうか・・・。

人間の生命の源は水。しかし，砂漠では水を手に入れることは容易ではありませんでした。まず，雨が降らない。また，たとえ降ったとしても，乾燥しているため，わずかに降った雨は大地にしみこむ前に蒸発してしまいます。このような条件でどうやって生きていけばよいのか・・・。昔の人は考えました。イラン中部はイラン高原といって，高地なので，周りには高い山がありました。その山頂付近には，冬になると雪が降りました。その雪融け水を利用しようと考えたのです。しかし，日本のように雪融け水が川を流れることはありませんでした。なぜなら，空気が乾燥しているため，流れているうちに蒸発してしまうからです。雪融け水は地下を流れていました。その地下水が流れる道は・・・。人間がつくった水路なのです。イランでは，砂漠地帯の地下に流れる水路をガナート（QANAT）（日本の社会の教科書にはカナートと表記されることが多い）といいます。ガナートは2，500年前（アケメネス朝ペルシア＝ペルセポリスをつくった時代）からつくられていたという歴史が残っています。



SUNTORY homepage より

ヤズドに，「ヤズド水博物館」というガナートの歴史などを解説した博物館があります。ここには，実際に使われていたガナートが残っています。また，ガナート作りに使った道具や水をくむ様子（写真左上）が写真や実物資料を展示して紹介されています。ガナートの深さはおよそ15～20m。急な階段を40～50段くらい下りていったところに，幅20cm程度の，石で囲まれた用水路がありました（写真左）。ここのガナートには，水が流れていませんでしたが，他の場所のガナートを見学したときは，水が流れていました。

イランでは，今でもこのようなガナートが30，000本以上使用されているそうです。また，この技術はイランだけでなく，周辺諸国にも伝わっていると言われています。他にも，水を蓄えておくための貯水池も数多く残っています。これは，アブ・アンバールと呼ばれ，独特の形（写真右奥）をしています。モスク（礼拝堂）の天井のように，タマネギ型をした土作りの建物があります。周囲には煙突のようなものが4本立っているのが普通です。周囲の煙突をよく見ると，上部に穴があいているのが分かるでしょうか。この煙突は，バード・ギール（風採り塔）（写真右）と呼ばれています。夏が近づくと，ヤズドなど砂漠地帯の日中の気温は40度を超えるようになります。また，強烈な太陽光の照り返しによって上昇気流つまり風が発生します。

古代の人々は，この砂漠特有の自然現象を利用して，水を冷やすことを思いつきました。アブ・アンバールに蓄えられた水には直接太陽の光が当たりませんが，すぐ外は灼熱の世界なので，水は温まります。この水の温度を下げるために，バード・ギールから入ってきた風を利用しました。灼熱の大地を吹く風ですが，バード・ギールから取り込まれた風は，太陽の光が届かない地下へと吹いていく間に冷やされ，水の温度を下げる効果がありました。　今，ヤズドの街を高いところから見ると，街の家々の上には，たくさんのバード・ギールがあります。これらは，現在でも天然のクーラーとして利用されています。ヤズド位置の高さを誇るバード・ギールがある庭園に行ったときのことです。当日は，朝から曇りがちで，昼から強風が吹き荒れ，とても寒い一日でした。バード・ギールの真下に立つと，塔の頂上から吹き降ろす風を体全体に受け，身も凍るようでした。ガイドさんに「ここは夏に来るといいぞ。周りは暑くてもここは快適さ。今（冬）は，とても寒いからお勧めしない。」といわれました。　ヤズドに限らず，イランの砂漠都市に住む人々は，過酷な自然条件にもめげず，長い歴史の中で自然とうまく向き合って生きてきたんだなぁと感じました。気候などの自然条件を人間の力によって変えることはできません。であるならば，その自然条件のなかでいかに快適に生きていくか。今，日本は東日本大震災による福島第一原子力発電所の災害で，国内の原子力発電所がほとんど稼働（かどう）していないと聞きます。いつでも好きなときに好きなだけ使えた電気が，足りなくなる日が来るかもしれません。日本の気候，気象条件の中で，電気だけに頼ることなく快適に生きていくにはどうすればよいか。そのヒントが，もしかしたらヤズドの街にはあるのかもしれません・・・。

◇ヤズド発祥の宗教・ゾロアスター教

通信第11号（ペルセポリス特集）でふれましたが，古代イランを支配していたアケメネス朝ペルシアの時代より，イスラム教が入ってくるまでの間，イランではゾロアスター教という宗教が中心となっていました。時の王たちも熱心に信仰していたことでしょう。サーサーン朝ペルシアの時代（紀元後226年～651年）には，ペルシア帝国の国教となっていました（第11号で書いた「アケメネス朝ペルシアでは，国の宗教＝国教となり，国王の保護のもとにおかれました。」は誤りで，正しくはサーサーン朝ペルシアの時代から）。このゾロアスター教と関係が深いのが，ヤズドです。

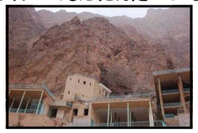
ヤズドには，多くのゾロアスター人が今でも住んでいます。彼らはイスラム教の国・イランでも，宗教の自由を保障され，生活をしています。ヤズド市内には，多くのゾロアスター教の神殿があります。一般的には，私のような観光目的で訪れる異教徒は神殿に入ることはできないのですが，観光客でも神殿内部を見学できるところがあり，そこを訪れました。

人が火をとても大切にしているこかります。神殿の中央には，150けている聖火が燃えていました。は，ゾロアスター教のシンボル・が飾られていました。これは余談ですが，ゾロアスター教のシンボル・アフラ＝マズダはアルファベット表記をすると，「AHURA＝MAZDA」となります。おや，このつづり，日本のどこかで見たつづりではありませんか？？

神殿の名前はアーテシュ・キャデ（火の家）（写真左）。ゾロアスターとは，この内部を見ると分0年前から絶やさず燃え続また，神殿の正面上部にアフラ＝マズダ（写真右）

そうです。広島市に本社のある日本の自動車メーカー，マツダのつづり（MAZDA）と同じなのです。マツダ自動車の松田社長は，自分の姓と，古代イランのゾロアスター教の神様・アフラ＝マズダをかけて，社名にしたと言われています。これは，イラン人も知っているエピソードで，日本の自動車メーカーが自分の国の宗教の神様の名前を社名につけたことに誇りをもっているようです。（ちなみに，日本のマツダ車はイランでもたくさん走っています。）

ゾロアスター教の聖地は，イラン国外にも何カ所かあるそうですが，イランでの聖地は，ヤズド市街から車で片道2時間弱の険しい山に囲まれた場所にあります。そこは，岩をくりぬいてつくられたほら穴のようになっていて，大きな木が生えています。周りには木という木が見当たらない中で，ここにだけ巨木が生えている・・・。つまり，ここには水があるのです。よく見ると，天井部分の岩肌からポタポタと滴のように水が落ちています。その様子から，この地が名付けられました。水がしたたる音をゾロアスター人は「チャク・チャク（CHAK　CHAK）」と表現したのです。以来，ここはイランにおけるゾロアスター教の聖地となりました。毎年6月のお祭りでは，国内外から大勢のゾロアスター教徒が巡礼に集まります。



また，ヤズド市街から車で15分ほど走ると，建物がとぎれた先に小高い丘が2つ見えます（写真右）。ここは，ペルシア語でダフメと呼ばれる場所で，日本語では「沈黙の塔」と訳されることが多いです。古来より，ゾロアスター人は，火・水・土をとても大切にしてきたことは以前（11号）に紹介したとおりです。ゾロアスター人にとってこの3つを汚すことは許されませんでした。では，人が死ぬとどうしたのでしょう・・・。日本のように火葬（かそう）にすると，火がけがれます。また，なきがらを土に埋める土葬（どそう）にすると，土がけがれます。そこで，ゾロアスター人は，火も水もけがさない死者を葬（ほうむ）る方法を考えつきました。それが鳥葬（ちょうそう）と呼ばれる，独特の方法です。

ゾロアスター人の誰かが亡くなると，人々がそのなきがらをかついで丘の上にやってきます。そして，丘の上の鳥葬場に安置します。やがて，鳥がやって来て死者をつつき始めます。そして，やがて死者は鳥によって喰い尽くされてしまうのです。こうやって，鳥の力によって自然に還す方法をとっていた（1930年代に禁止となり，今は，土葬となっているそうです）あとが，残っているのです。　また，そのふもとには，法律によって鳥葬が禁止となって以降，亡くなったゾロアスター人の墓が整然と並んでいました。イスラム教徒のお墓との1番の違いは，墓石にアフラ・マズダが描かれていることでしょうか。これまた余談ですが，この墓地の一角には墓をつくるための材料がこんもりと置かれていました。ガイドさんに聞くと，お墓をつくるのは家族や友達，親戚の男性が中心だそうです。レンガで型を作り，レンガとレンガをセメントで固定し，土をかぶせる・・・。そしてその中に遺体を安置する・・・。日本の基準からすると理解しにくい部分ではありますが，家族や親族の結束がとても強いイランならではです。

◇土壁が美しい旧市街

テヘラン暮らしも10か月を超えると，首都にありがちな高層ビル，高層マンションの林立する光景に飽きてきます。その点，ヤズドは街全体がとても低く，高層マンションや高層ビルはほとんど見られません。また，11世紀以降（今からおよそ1000年前）から建てられたヤズド旧市街はとても美しいです。街のシンボルは大きく2つ。1つは，イランで最も高いミナレット（モスクにある尖った塔）をもつ，マスジェデ・ジャーメ（写真上左・中）。行ったときはちょうど金曜日の早朝で，礼拝を終えた人々がモスクから外へ出て行く光景に出くわしました。シーンと静まりかえったモスクの中を真っ黒なチャドルを身にまとった女性が歩くさまは，まさにイスラムの国を象徴する光景です。もう一つのシンボルは，アミール・チャグマーグのタキイェと言います（写真上の右）。これは，モスクやバーザール（商店街），カルバーンサラーイ（かつて砂漠を旅した隊商たちが寝泊まりするための隊商宿のこと）などの複合施設です。残念ながら，ここの上に登ることはできませんでしたが，登れば，ヤズド市内を一望できるすばらしい景観が広がっているそうです。また，どちらのシンボルも，夜になるとライトアップされ，日中とは違った幻想的な印象を与えてくれます。他にも，ここヤズドを初めて訪れた西洋人であると言われるマルコ＝ポーロの名がついた時計塔や，往時の公衆浴場（ハンマーム）を改装したチャイハーネ（喫茶店兼食堂）（写真左下）など，テヘランでは見ることのできない歴史的建造物の数々に出合うことができました。そして，これらのスポットを結ぶ道の両側は土壁におおわれ（写真左上），また，所々日除けのためかトンネル状になっています。街の喧騒も聞こえない道を歩いていると，自分がいつの時代かにタイムスリップしたかのような，不思議な感覚を覚えます。この道を歩いていくと，広場に出ました。ここでは，子どもたちがサッカーをしていました（写真右）。土壁に囲まれた中でわいわいとサッカーに興じる子どもたちが，とても無邪気で，景色の「静」と，子どもたちの「動」との対比がとても印象的でした。

◇旅で出会った素敵な人々

旅の魅力は何でしょう？めずらしい景色，おいしい食べ物，おみやげ・・・。人それぞれ，「旅」に求めるものはさまざまです。私が旅に求めるものは，「非日常への好奇心」，そして「旅先での出会い」です。今回の旅は，家族をテヘランに残しての同僚の先生との2人旅でした。今回は，私のペルシア語の力がどこまで通用するか，英語の表記をどれだけ読めるかを確かめるため，ガイドの人に頼らずに出かけました。頼るべくは自分の語学力と同僚の先生のみ。そんな中，いくつかのハプニングがありました。予定していたバスターミナルと違うところに到着したり，ホテルが予想以上に遠かったり，観光場所が閉まっていたり・・・。そんなハプニングの中，心に残る旅ができたのは，当地・ヤズドに暮らしている人々でした。2日間に渡って，車に乗せてくれ，歩いては行けない観光地に連れて行ってくれたタクシードライバー（写真左下）。また，ホテルに向かうためにトボトボと夜道を歩く私たちを車に乗せてくれ，親切にホテルまで送り届けてくれた人。観光場所が閉まっていて，がっかりしていた私たちに声をかけてくれた食堂のお客さん・・・。日本人と知って目の色を変えて話しかけてくれる人もたくさんいます（商売目的ではなく）。イラン人は，本当に親切で，おもてなしの心（ホスピタリティ）にあふれていると思います。海外との関係が悪化している現在ですが，決して国民は悪い人ではありません。欧米諸国による攻撃の対象となる国ではないのです。なかなかイラン国外にいる人たちから見ると，想像できないかもしれませんが，実際に暮らしてみると切に思います。私たちのように，イランに暮らす外国人は，外にむけて発信する必要があると思います。それによって，より多くの人が本当のことを知ることで，正しい行動ができるのではないでしょうか。

次号は3月初旬配信予定

باد از تهران

～　テヘランからの風　～　　第１８号　３月２日配信

伊里中学校の皆さん，こんにちは。気がつけば、２月も終わり、昨日から３月。１年の終わりの月を迎えました。１，２年生の皆さんは学年末テストお疲れさまでした。３年生は、来週にせまった県立一般入試まで、あとわずか。サクラ咲く春を迎えるための、ラストスパートを期待します。

ここテヘランでは、昨年１１月より続いた寒い寒い冬がようやく終わりを迎えようとしています。先日は最高気温が１５度近くになり、昼はポカポカ陽気で春の訪れを感じました。学校前の街路樹も、冬の間は葉を落とし、寒々しく感じられましたが、じっと見ると、枝に無数の枝がついていました。植物も、季節の移り変わりを感じているようです。

季節の変わり目と言えば、以前お伝えしましたが、イランのお正月、つまり新年（ノウ・ルーズ）は３月。今年は、閏年の関係で、新年が３月２０日となっています。ということは、日本で言うと、今は１２月１０日過ぎくらい。年賀状を書いたり、大掃除をしたり、新年の準備に大忙しのころです。ここイランでも、日本と同じような光景が見られます。大掃除は日本と同じように、１年間の汚れを取り、気持ちよく新年を迎えるために欠かせません。大掃除のことを、イランでは「フーネ　タクニン（家を揺らす）」といいます。家を揺らすとは、つまり、汚れなどイヤなものを追い払うということのようです。また、通信１５号で書きましたが、新年の準備として７つのSの文字から始まる縁起物を用意します。これらは「ハフトスィーン（７つのS）」といい、毎年、年の瀬になると街のスーパーに並ぶそうです。昨日、買い物をしに近所のスーパーに買い物に行くと、ふだんはたくさんの野菜や果物が並べられているスペースに、赤と黒の金魚が泳ぐ金魚鉢がたくさん並べられていました。水の入った鉢も縁起物として家に飾られるそうです。この他にも、親戚の人の家を訪れる時の手土産にするための箱詰めのチョコレートもうずたかく積まれ、売られていました。これからイラン全土は、新年に向けて徐々にせわしなさが増してくるでしょう。洋の東西を問わず、新年を迎えることは楽しいことのようです。

さて、今号は，１年間かけて私が学習してきたイランの言語＝ペルシア語についてです。この通信のタイトル「テヘランからの風」の原語は何と書いてあるか、分かりますか？分かりませんよね。当然です。私もつい、１か月ほど前まで読めませんでした。最近になってやっと街中の看板や標識が何となく読めるようになってきました。みなさんに文字を覚えてもらいたいとは思っていません。しかし、アルファベット以外の文字を使う国について、ちょっと興味をもってもらいたいのです。

◇ペルシア語とは

イランで最も多くの人に話されている言葉はペルシア語です。ペルシア語は言葉のグループとしては、「インド・ヨーロッパ祖語（そご）」の仲間に入り、主にヨーロッパで話されている英語やフランス語、ドイツ語、スペイン語、また、インドで話されているヒンディー語などと同じ仲間にはいるそうです。さらに深い説明もあるのですが、ここでは省略します。

日本人は、ほかでもない日本語を使って会話をしています。でも、ABCなどのアルファベットに古くから慣れ親しんだ日本人にとって、例えば「P」を見れば「Parking（駐車場）なんだな。」とか、洋服の［S］［M］［L］などを見て自分にあった大きさの服を買うことはできるはずです。小学校では「ローマ字」を習い、街中のあらゆる場所にアルファベット表記の文字がならぶ日本にとって、英語に対する珍しさはもはや0といってもよいでしょう。しかし、ここイランでは、日本と違い、英語は街中にあふれてはいません。外国人が大勢訪れる博物館や美術館、観光地の標識には英語表記もありますが、多くの場所ではペルシア語表記しかないのが普通です。ペルシア語は私たち日本人にとっては未知なる言語・文字です。日本に初めて訪れた外国人が、日本語の看板を見ても？？？とうなるだけで、何もできないのと同じで、私たちも、ペルシア語だけで書かれた標識の前に立っても、「このミミズは何だ？？？」と固まるはずです。

ペルシア語が、私のようなイランで暮らす外国人にとって難しいと感じる理由は、自分で１年前からをふり返って、だいたい次の３つのことが原因です。

１つめは、文字の切れ目が分からないこと。２つめは、書体がいくつかあり、また、似た文字がたくさんあること。そして、もう一つは、左からではなく、右から読むということ。これらについては、自分の経験をもとに次に詳しく説明したいと思います。

◇ペルシア語の文字

ペルシア語にはどんな文字があるのでしょうか？ペルシア語は３２文字からなる言語です。英語が２６文字、ペルシア語とよく似たアラビア語が２８文字であることを比べると、少し多いような気もします。でも、日本語はどうですか？「ひらがな４６文字とカタカナ４６文字、それに漢字が１５００文字以上・・・。」日本語が、「世界一難しい言語」と言われる一つの理由です。

アラビア語とペルシア語はとても似ています。ペルシア語にあって、アラビア語にない文字が４つあるだけです。しかし、文法や語彙なども全くといっていいほど違います。これはとても不思議なことでした。同じ文字を使っているので、区別がつかないのが現状ですが、大きな違いがあるようです。そういえば、中国語と日本語も同じ「漢字」を使っていますが、意味が全然違うことが多いですね。それと同じだと思ってください。

ところで日本語とペルシア語は、文法的に実は似ているのでます。例えば、「私は・本を・持っている。」という文章を考えてみましょう。これを、もし英語で言うとどうなりますか？

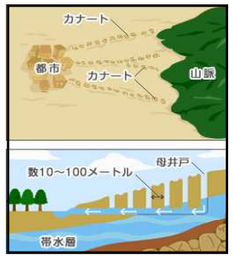
分かりますよね。「I　have　a　book.」となります。これを直訳すると、「わたしは・もっている。１冊の本を。」となります。上の文（日本語）をペルシア語に翻訳すると、「Man　yek　ketab　daram.（私は、一冊の本を持っている））」となり、日本語と言葉の流れが同じになります。

ح
خ
د
ذ
ر
ز
ژ
س
ض
ط
ظ
ع
غ
ق
ک
گ
ل
م
ن
و
ه
ی

ا ب پ ت ث ج چ ح خ د ذ ر ز ژ س ش ص ض ط ظ ع غ ف ق ک گ ل م ن و ه ی
a b p t s j ch h x d z r z zh s sh s z t z ʼ gh f gh
(q) k g l m n v/u h y/i

。ペルシア語の。砂漠の気候は極端です。年間を通して快適な季節というものはほとんどなく，初夏から初秋にかけては最高気温が40度を超える灼熱の大地に，また，冬は寒風ふきすさぶ底冷えのする大地となります。実は，イランの国土の大部分はこのような気候の砂漠がしめていて，農業や経済活動はおろか，人が

住むことさえもままなりません。しかし，古来より，イラン人はそのような，言うなれば「不毛の大地」を利用する知恵を身につけてきました。ここヤズドをはじめ，砂漠の中には大小さまざまな都市が点在しています。そして，周りには緑の畑や数多くの樹木があります。年間降水量50㎜にも満たない場所で，人々はどうして生活をして，命をつないできたのでしょうか・・・。



人間の生命の源は水。しかし，砂漠では水を手に入れることは容易ではありませんでした。まず，雨が降らない。また，たとえ降ったとしても，乾燥しているため，わずかに降った雨は大地にしみこむ前に蒸発してしまいます。このような条件でどうやって生きていけばよいのか・・・。昔の人は考えました。イラン中部はイラン高原といって，高地なので，周りには高い山がありました。その山頂付近には，冬になると雪が降りました。その雪融け水を利用しようと考えたのです。しかし，日本のように雪融け水が川を流れることはありませんでした。なぜなら，空気が乾燥しているため，流れているうちに蒸発してしまうからです。雪融け水は地下を流れていました。その地下水が流れる道は・・・。人間がつくった水路なのです。イランでは，砂漠地帯の地下に流れる水路をガナート（QANAT）（日本の社会の教科書にはカナートと表記されることが多い）といいます。ガナートは2，500年前（アケメネス朝ペルシア＝ペルセポリスをつくった時代）からつくられていたという歴史が残っています。

ヤズドに，「ヤズド水博物館」というガナートの歴史などを解説した博物館があります。ここには，実際に使われていたガナートが残

SUNTORY homepage より

っています。また，ガナート作りに使った道具や水をくむ様子（写真左上）が写真や実物資料を展示して紹介されています。ガナートの深さはおよそ15～20m。急な階段を40～50段くらい下りていったところに，幅20cm程度の，石で囲まれた用水路がありました（写真左）。ここのガナートには，水が流れていませんでしたが，他の場所のガナートを見学したときは，水が流れていました。

イランでは，今でもこのようなガナートが30，000本以上使用されているそうです。また，この技術はイランだけでなく，周辺諸国にも伝わっていると言われています。他にも，水を蓄えておくための貯水池も数多く残っています。これは，アブ・アンバールと呼ばれ，独特の形（写真右奥）をしています。モスク（礼拝堂）の天井のように，タマネギ型をした土作りの建物があります。周囲には煙突のようなものが4本立っているのが普通です。周囲の煙突をよく見ると，上部に穴があいているのが分かるでしょうか。この煙突は，バード・ギール（風採り塔）（写真右）と呼ばれています。夏が近づくと，ヤズドなど砂漠地帯の日中の気温は40度を超えるようになります。また，強烈な太陽光の照り返しによって上昇気流つまり風が発生します。

古代の人々は，この砂漠特有の自然現象を利用して，水を冷やすことを思いつきました。アブ・アンバールに蓄えられた水には直接太陽の光が当たりませんが，すぐ外は灼熱の世界なので，水は温まります。この水の温度を下げるために，バード・ギールから入ってきた風を利用しました。灼熱の大地を吹く風ですが，バード・ギールから取り込まれた風は，太陽の光が届かない地下へと吹いていく間に冷やされ，水の温度を下げる効果

がありました。　今，ヤズドの街を高いところから見ると，街の家々の上には，たくさんのバード・ギールがあります。これらは，現在でも天然のクーラーとして利用されています。ヤズド位置の高さを誇るバード・ギールがある庭園に行ったときのことです。当日は，朝から曇りがちで，昼から強風が吹き荒れ，とても寒い一日でした。バード・ギールの真下に立つと，塔の頂上から吹き降ろす風を体全体に受け，身も凍るようでした。ガイドさんに「ここは夏に来るといいぞ。周りは暑くてもここは快適さ。今（冬）は，とても寒いからお勧めしない。」といわれました。　ヤズドに限らず，イランの砂漠都市に住む人々は，過酷な自然条件にもめげず，長い歴史の中で自然とうまく向き合って生きてきたんだなぁと感じました。気候などの自然条件を人間の力によって変えることはできません。であるならば，その自然条件のなかでいかに快適に生きていくか。今，日本は東日本大震災による福島第一原子力発電所の災害で，国内の原子力発電所がほとんど稼働（かどう）していないと聞きます。いつでも好きなときに好きなだけ使えた電気が，足りなくなる日が来るかもしれません。日本の気候，気象条件の中で，電気だけに頼ることなく快適に生きていくにはどうすればよいか。そのヒントが，もしかしたらヤズドの街にはあるのかもしれません・・・。

◇ヤズド発祥の宗教・ゾロアスター教

通信第11号（ペルセポリス特集）でふれましたが，古代イランを支配していたアケメネス朝ペルシアの時代より，イスラム教が入ってくるまでの間，イランではゾロアスター教という宗教が中心となっていました。時の王たちも熱心に信仰していたことでしょう。サーサーン朝ペルシアの時代（紀元後226年～651年）には，ペルシア帝国の国教となっていました（第11号で書いた「アケメネス朝ペルシアでは，国の宗教＝国教となり，国王の保護のもとにおかれました。」は誤りで，正しくはサーサーン朝ペルシアの時代から）。このゾロアスター教と関係が深いのが，ヤズドです。

ヤズドには，多くのゾロアスター人が今でも住んでいます。彼らはイスラム教の国・イランでも，宗教の自由を保障され，生活をしています。ヤズド市内には，多くのゾロアスター教の神殿があります。一般的には，私のような観光目的で訪れる異教徒は神殿に入ることはできないのですが，観光客でも神殿内部を見学できるところがあり，そこを訪れました。

人が火をとても大切にしているこかります。神殿の中央には，150けている聖火が燃えていました。神殿の名前はアーテシュ・キャデ（火の家）（写真左）。ゾロアスターは，ゾロアスター教のシンボル・とは，この内部を見ると分が飾られていました。これは余談ですが，ゾロアスター教のシンボル・アフラ＝マズダはアルファベット表記をすると，「AHURA＝MAZDA」となります。おや，このつづり，日本のどこかで見たつづりではありませんか？？

0年前から絶やさず燃え続また，神殿の正面上部にアフラ＝マズダ（写真右）

そうです。広島市に本社のある日本の自動車メーカー，マツダのつづり（MAZDA）と同じなのです。マツダ自動車の松田社長は，自分の姓と，古代イランのゾロアスター教の神様・アフラ＝マズダをかけて，社名にしたと言われています。これは，イラン人も知っているエピソードで，日本の自動車メーカーが自分の国の宗教の神様の名前を社名につけたことに誇りをもっているようです。（ちなみに，日本のマツダ車はイランでもたくさん走っています。）

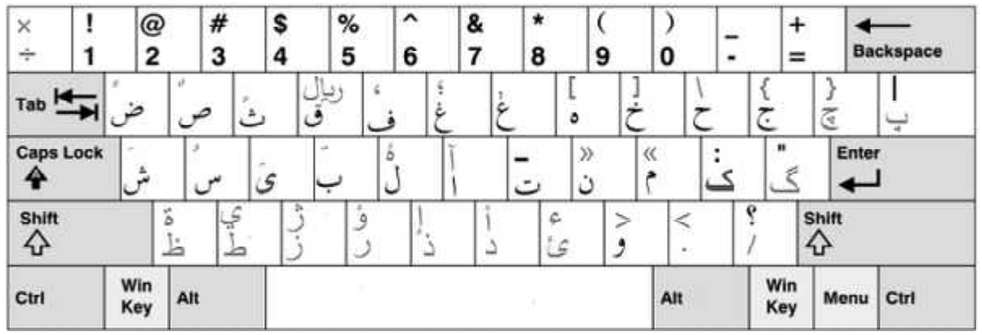
ゾロアスター教の聖地は，イラン国外にも何カ所かあるそうですが，イランでの聖地は，ヤズド市街から車で片道2時間弱の険しい山に囲まれた場所にあります。そこは，岩をくりぬいてつくられたほら穴のようになっていて，大きな木が生えています。周りには木という木が見当たらない中で，ここにだけ巨木が生えている・・・。つまり，ここには水があるのです。よく見ると，天井部分の岩肌からポタポタと滴のように水が落ちています。その様子から，この地が名付けられました。水がしたたる音をゾロアスター人は「チャク・チャク（CHAK CHAK」と表現したのです。以来，ここはイランにおけるゾロアスター教の聖地となりました。毎年6月のお祭りでは，国内外から大勢のゾロアスター教徒が巡礼に集まります。

また，ヤズド市街から車で15分ほど走ると，建物がとぎれた先に小高い丘が2つ見えます（写真右）。ここは，ペルシア語でダフメと呼ばれる場所で，日本語では「沈黙の塔」と訳されることが多いです。古来より，ゾロアスター人は，火・水・土をとても大切にしてきたことは以前（11号）に紹介したとおりです。ゾロアスター人にとってこの3つを汚すことは許されませんでした。では，人が死ぬとどうしたのでしょう・・・。日本のように火葬（かそう）にすると，火がけがれます。また，なきがらを土に埋める土葬（どそう）にすると，土がけがれます。そこで，ゾロアスター人は，火も水もけがさない死者を葬（ほうむ）る方法を考えつきました。それが鳥葬（ちょうそう）と呼ばれる，独特の方法です。

ゾロアスター人の誰かが亡くなると，人々がそのなきがらをかついで丘の上にやってきます。そして，丘の上の鳥葬場に安置します。やがて，鳥がやって来て死者をつつき始めます。そして，やがて死者は鳥によって喰い尽くされてしまうのです。こうやって，鳥の力によって自然に還す方法をとっていた（1930年代に禁止となり，今は，土葬となっているそうです）あとが，残っているのです。　また，そのふもとには，法律によって鳥葬が禁止となって以降，亡くなったゾロアスター人の墓が整然と並んでいました。イスラム教徒のお墓との1番の違いは，墓石にアフラ・マズダが描かれていることでしょうか。これまた余談ですが，この墓地の一角には墓をつくるための材料がこんもりと置かれていました。ガイドさんに聞くと，お墓をつくるのは家族や友達，親戚の男性が中心だそうです。レンガで型を作り，レンガとレンガをセメントで固定し，土をかぶせる・・・。そしてその中に遺体を安置する・・・。日本の基準からすると理解しにくい部分ではありますが，家族や親族の結束がとても強いイランならではです。

◇土壁が美しい旧市街

テヘラン暮らしも10か月を超えると，首都にありがちな高層ビル，高層マンションの林立する光景に飽きてきます。その点，ヤズドは街全体がとても低く，高層マンションや高層ビルはほとんど見られません。また，11世紀以降（今からおよそ1000年前）から建てられたヤズド旧市街はとても美しいです。街のシンボルは大きく2つ。1つは，イランで最も高いミナレット（モスクにある尖った塔）をもつ，マスジェデ・ジャーメ（写真上左・中）。行ったときはちょうど金曜日の早朝で，礼拝を終えた人々がモスクから外へ出て行く光景に出くわしました。シーンと静まりかえったモスクの中を真っ黒なチャドルを身にまとった女性が歩くさまは，まさにイスラムの国を象徴する光景です。もう一つのシンボルは，アミール・チャグマーグのタキイェと言います（写真上の右）。これは，モスクやバーザール（商店街），カルバーンサラーイ（かつて砂漠を旅した隊商たちが寝泊まりするための隊商宿のこと）などの複合施設です。残念ながら，ここの上に登ることはできませんでしたが，登れば，ヤズド市内を一望できるすばらしい景観が広がっているそうです。また，どちらのシンボルも，夜になるとライトアップされ，日中とは違った幻想的な印象を与えてくれます。他にも，ここヤズドを初めて訪れた西洋人であると言われるマルコ＝ポーロの名がついた時計塔や，往時の公衆浴場（ハンマーム）を改装したチャイハーネ（喫茶店兼食堂）（写真左下）など，テヘランでは見ることのできない歴史的建造物の数々に出合うことができました。そして，これらのスポットを結ぶ道の両側は土壁におおわれ（写真左上），また，所々日除けのためかトンネル状になっています。街の喧騒も聞こえない道を歩いていると，自分がいつの時代かにタイムスリップしたかのような，不思議な感覚を覚えます。この道を歩いていくと，広場に出ました。ここでは，子どもたちがサッカーをしていました（写真右）。土壁に囲まれた中でわいわいとサッカーに興じる子どもたちが，とても無邪気で，景色の「静」と，子どもたちの「動」との対比がとても印象的でした。

◇旅で出会った素敵な人々

旅の魅力は何でしょう？めずらしい景色，おいしい食べ物，おみやげ・・・。人それぞれ，「旅」に求めるものはさまざまです。私が旅に求めるものは，「非日常への好奇心」，そして「旅先での出会い」です。今回の旅は，家族をテヘランに残しての同僚の先生との2人旅でした。今回は，私のペルシア語の力がどこまで通用するか，英語の表記をどれだけ読めるかを確かめるため，ガイドの人に頼らずに出かけました。頼るべくは自分の語学力と同僚の先生のみ。そんな中，いくつかのハプニングがありました。予定していたバスターミナルと違うところに到着したり，ホテルが予想以上に遠かったり，観光場所が閉まっていたり・・・。そんなハプニングの中，心に残る旅ができたのは，当地・ヤズドに暮らしている人々でした。2日間に渡って，車に乗せてくれ，歩いては行けない観光地に連れて行ってくれたタクシードライバー（写真左下）。また，ホテルに向かうためにトボトボと夜道を歩く私たちを車に乗せてくれ，親切にホテルまで送り届けてくれた人。観光場所が閉まっていて，がっかりしていた私たちに声をかけてくれた食堂のお客さん・・・。日本人と知って目の色を変えて話しかけてくれる人もたくさんいます（商売目的ではなく）。イラン人は，本当に親切で，おもてなしの心（ホスピタリティ）にあふれていると思います。海外との関係が悪化している現在ですが，決して国民は悪い人ではありません。欧米諸国による攻撃の対象となる国ではないのです。なかなかイラン国外にいる人たちから見ると，想像できないかもしれませんが，実際に暮らしてみると切に思います。私たちのように，イランに暮らす外国人は，外にむけて発信する必要があると思います。それによって，より多くの人が本当のことを知ることで，正しい行動ができるのではないでしょうか。